

博士留学生の日本語学習

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-06-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 袴田, 麻里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009634

博士留学生の日本語学習

袴 田 麻 里 (国際交流センター)

【要 旨】

研究に重きを置く博士留学生を対象に、その日本語学習状況を調査し、日本語学習の重要性は理解していても研究との両立が難しいことを確認した。博士留学生は、日本語を受講しても修了しない場合が多く、日本語力は低いままである。そのため、日本での生活や卒業後の進路選択に極めて厳しい制限がかかる。1年目は比較的時間の余裕があるので、この時期に可能な限り日本語を受講し日本語力を高められるよう、研究活動を優先する博士留学生に配慮した日本語コースの整備が必要である。

【キーワード】 博士留学生、日本語学習、学習ニーズ

1. はじめに

留学生受入れは、2003年に「留学生10万人計画」が達成され、続く「留学生30万人計画」において入り口だけでなく、卒業後にも配慮した受け入れ態勢が議論されるようになった。また、政府は少子・高齢化、人口減少社会が本格化する中で、持続的成長を遂げるために高度外国人材の受入れを重要な成長戦略の一つと位置づけ、理工系人材の積極的な受入れを推進している。

日本の理工系大学院は英語のみで研究活動が可能な分野が多く、英語で単位や学位が取得できる課程を持つ大学が少なくない。日本語不問で留学生を受入れることが可能だが、日本語未習、または日本語力が著しく低い留学生の場合、学内外でコミュニケーションに支障を来す恐れがある。多くの大学では留学生センター等において、国費留学生をはじめとする外国人留学生に対して日本語教育を行っているが、日本語学習の重要性は理解していても研究との両立が難しい。

本稿では、特に研究に重きを置く博士留学生を対象に、その日本語学習状況を調査し、日本語不問で受入れる留学生の日本語教育のあり方を考察したい。

2. 博士課程の概要

静岡大学では、2006年度に電子科学研究科（博士課程）、理工学研究科後期課程、農学研究科後期課程を統合し、学際的な科学・技術を教育研究する博士課程として、創造科学技術大学院自然科学系教育部（the Graduate School of Science and Technology、以下GSST）を発足させた。静岡大学は、静岡キャンパスと浜松キャンパスに分かれており、GSST所属の農学・理学系の学生は静岡キャンパス、工学・情報学系の学生は浜松キャンパスに在籍している。

GSSTは、英語で授業、ゼミ活動、実験などを行い学位が取得できる課程であり、日本

語不問で積極的な留学生受入れができる唯一の部局である。そのため、発足時より留学生が一定の割合を占め、静岡大学の課程の中で留学生の占める割合がもっとも大きい(表1)。

2006年4月から2015年4月までにGSSTに入学した留学生は、210名である(除籍者2名を含む)。静岡大学の修士課程からの進学者が35名(うち3名は学士課程・修士課程とも静岡大学)、入学前に研究生として静岡大学に在籍した留学生は23名(国費留学生11名、私費留学生10名、外国政府派遣生2名)、直接GSSTに入学した留学生は151名(国費留学生65名、私費留学生72名、外国政府派遣生14名)である。この他に、他大学からの2年次編入者(国費留学生)が1名いる。静岡キャンパスにはこれまで79名が在籍し、浜松キャンパスには130名が在籍している。研究生として在籍した国費生1名と外国政府派遣生1名、直接入学した外国政府派遣生の2名は、日本国内で学士課程を修了し、いったん帰国した後、GSSTに入学した学生である。また、直接入学した私費生1名は永住ビザを持つ学生である。

表1 GSST在籍者数と留学生の割合(各年度5月1日現在)

	留学生数	全在籍者数	留学生の割合
2006年	5	39	12.8%
2007年	15	92	16.3%
2008年	26	135	19.3%
2009年	43	168	25.6%
2010年	53	171	31.0%
2011年	73	195	37.4%
2012年	77	190	40.5%
2013年	85	203	41.9%
2014年	89	200	44.5%
2015年	86	196	43.9%

(参考)

2015年学士	158	8657	1.8%
2015年修士	78	1256	6.2%

3. 日本語コースについて

数年間の日本での生活に必要な日本語力を身につけたいという留学生のニーズに応え、静岡大学では国際交流センターが博士生を含む外国人留学生向けの日本語コースを運営している。博士留学生が受講する日本語コースとしては、日本語研修コースと日本語教育プログラムがある(表2)。

日本語研修コースは、大使館推薦の研究留学生や教育学部(静岡キャンパス)に配置される教員研修留学生など国費留学生を主たる受講者とし、正規課程進学前に15週間日本語を集中的に学習する初級コースである(クラス名は「日本語1」)。国際交流センター長が適当と認めた場合、私費留学生も受講できる。文法や語彙を中心に学ぶ「基礎日本語」を

週に10コマ、その他に「漢字」や「作文」など技能別のクラスを週に5コマ受講する（合計225コマ）。成績は、80%以上出席し所定の試験を受験した上で、S「秀」、A「優」、B「良」、C「可」及びD「不可」で表される。出席が足りない場合、成績はDとなる。

日本語教育プログラムは、すべての留学生を対象とし、日常的なコミュニケーションができるようになることを目的とする15週間の補講的な日本語コースである。レベルは入門から上級まで5段階に分かれており、初心者を対象とする入門（クラス名は「日本語1」）は週4コマ、初級（同「日本語2」）は週3コマ、中級前半（同「日本語3」）と中級後半（同「日本語4」）は技能別に3クラス開講されており週に各1コマ、上級（同「日本語5」）も技能別に2クラス開講で週に各1コマである。日本語3以上では、研究活動に必要な口頭発表やレポート執筆の技能などの練習も行う。日本語4と日本語5は、静岡キャンパスのみの開講である。成績は日本語研修コースと同じ基準で評価され、国際交流センターの単位が認定される（卒業単位には含まれない）。

日本語教育プログラムは原則として留学生対象のコースだが、定員に空きがある場合に限り、静岡大学の研究者、研究者及び留学生の配偶者などで、プレイスメント・テストの結果から留学生と日本語力が同等であると判断され、センター長が適当と認めた者は、所定の授業料を納付して受講することができる。ただし、単位は認定されない。

表2 日本語コースの概要

	日本語研修コース	日本語教育プログラム
開講キャンパス	静岡キャンパス	静岡キャンパス、浜松キャンパス
レベル	初級	入門、初級、中級前半、中級後半、上級
クラスと授業数	日本語1：週15コマ×15週	日本語1：週4コマ×15週 日本語2：週3コマ×15週 日本語3：各クラス週1コマ×15週 日本語4：各クラス週1コマ×15週（静岡のみ） 日本語5：各クラス週1コマ×15週（静岡のみ）
成績	<ul style="list-style-type: none"> ・80%以上出席し所定の試験を受験 ・S「秀（90～100点）」、A「優（80～89点）」、B「良（70～79点）」、C「可（60～69点）」及びD「不可（59点以下）」 	

4. 博士留学生の日本語受講状況

GSST所属の博士留学生は、ほとんどが日本語教育プログラムを受講し、その受講者数は、どの学期も両キャンパスを合わせておおよそ10名から20数名である（表3）。GSST開設の2006年度から3年次在籍者までが揃う2008年後期までをとっても、受講者は在籍する留学生数の半数に満たず、どの学期も、日本語受講者が多いとは言えない。

静岡キャンパスと浜松キャンパスでは、浜松キャンパスのほうが留学生の在籍者が多く、受講者数もほとんどの学期で浜松キャンパスのほうが多い。在籍者数に対する受講割合（図1）を見てみると、静岡キャンパスは2010年までは平均約4割の留学生が日本語を受講し

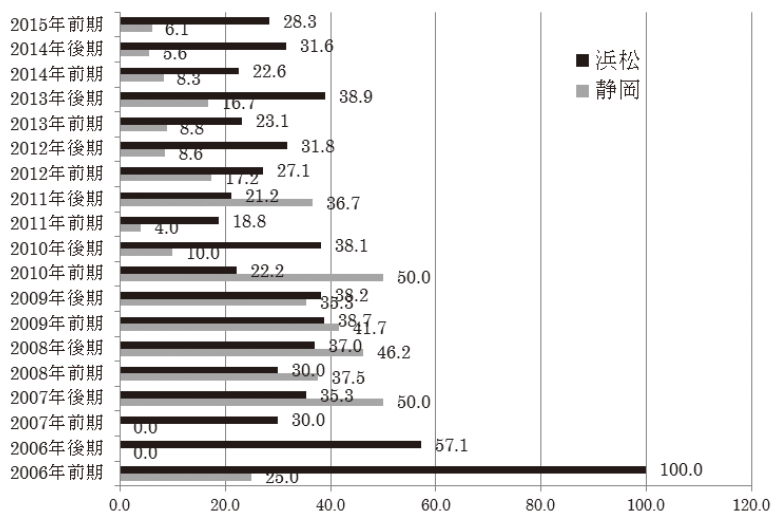
ていたが、それ以降は1割以下の受講率の学期が多い。それに対し浜松キャンパスは、GSST 発足年度を除き、おおむね3割程度の受講率である。

表3 博士留学生の日本語受講者数

	受講者数 (人)			留学生入学者数 (人)			留学生在籍者数 (人)		
	静岡	浜松	合計	静岡	浜松	合計	静岡	浜松	合計
2006年前期	1	1	2	4	1	2	4	1	5
2006年後期	0	4	4	0	6	4	4	7	11
2007年前期	0	3	3	1	3	3	5	10	15
2007年後期	4	6	10	3	7	10	8	17	25
2008年前期	3	6	9	0	3	9	8	20	28
2008年後期	6	10	16	5	7	16	13	27	40
2009年前期	*5	12	17	2	6	17	12	31	43
2009年後期	6	13	19	5	7	19	17	34	51
2010年前期	9	8	17	3	4	17	18	36	54
2010年後期	2	16	18	6	11	18	20	42	62
2011年前期	1	9	10	6	9	10	25	48	73
2011年後期	11	11	22	10	9	22	30	52	82
2012年前期	5	13	18	2	3	18	29	48	77
2012年後期	3	14	17	8	8	17	35	44	79
2013年前期	*3	12	15	3	10	15	34	52	86
2013年後期	6	21	27	7	18	27	36	54	90
2014年前期	3	12	15	3	5	15	36	53	89
2014年後期	2	18	20	11	12	20	36	57	93
2015年前期	2	15	17	3	1	17	33	53	86

「*」は、日本語研修コース受講者1名を含む

図1：キャンパス別 日本語受講割合（％）



すでにある程度の日本語力を持つ留学生は、日本語受講の必要がない。博士留学生の日本語受講状況を入学別（表4）に見ると、修士からの進学者は35名いるが、受講率が低いことが分かる。静岡大学の理工系の修士課程は日本語で講義・実験・実習等の研究指導が行われるため、修士課程からの進学者はある程度の日本語力を身につけているのである。その結果、静岡キャンパスでは受講者はゼロ、浜松キャンパスには受講者が4名いるが、4名とも修士入学時に日本語未習で来日し、入学後、日本語教育プログラムを履修した留学生である。

一方、GSST入学前に研究生として静岡大学に在籍した留学生は、非常に高い割合で日本語を受講している。23名の内訳は、静岡が3名、浜松が20名である。国費留学生は、全員が日本語を受講している。ただ、国費留学生を対象とする日本語研修コースを受講した留学生は2009年に静岡キャンパスで1名、2013年に浜松キャンパスで1名であった。私費留学生も全員が日本語を受講しているが、外国政府派遣生2名は日本国内の大学で学士課程を修了し、いったん帰国してからGSSTに入学した学生であり、修士生同様十分な日本語力を有しているため、受講しなかった。

GSSTに直接入学した留学生は、151名中128名が日本語を受講した。研究生を経て入学した留学生と異なり、どの費用区分にも日本語を受講しない留学生が3割弱いる。直接入学し、日本語を受講しない留学生は静岡キャンパスのほうが多い。特に国費留学生の日本語受講率は、浜松キャンパスが100.0%なのに対し、静岡キャンパスでは64.7%とかなり差がある。また、私費留学生も浜松の83.3%に対し、静岡は76.2%とやや少ない。一方、外国政府派遣留学生では、静岡に在籍する留学生は全員が受講しているが、浜松では7人中2名が受講していない。この2名は日本国内の大学で学士課程を修了し、いったん帰国してからGSSTに入学した学生である。日本語力が高いため受講の必要がない学生であり、外国政府派遣留学生は静岡、浜松とも日本語教育が必要な留学生は全員受講したと言える。

表4 入学別の日本語受講割合

		静岡			浜松			全体		
		在籍者	受講者	受講率	在籍者	受講者	受講率	在籍者	受講者	受講率
進学者 修士から	国費生	1	0	0.0%	0	0	—	1	0	0.0%
	私費生	8	0	0.0%	25	4	16.0%	33	4	12.1%
	外国政府派遣生	1	0	0.0%	0	0	—	1	0	0.0%
	合計	10	0	0.0%	25	4	16.0%	35	4	11.4%
研究生 経由	国費生	1	1	100.0%	10	10	100.0%	11	11	100.0%
	私費生	2	2	100.0%	8	8	100.0%	10	10	100.0%
	外国政府派遣生	0	0	—	2	0	0.0%	2	0	0.0%
	合計	3	3	100.0%	20	18	90.0%	23	21	91.3%
直接 入学者	国費生	17	11	64.7%	48	48	100.0%	65	59	90.8%
	私費生	42	32	76.2%	30	25	83.3%	72	57	79.2%
	外国政府派遣生	7	7	100.0%	7	5	71.4%	14	12	85.7%
	合計	66	50	75.8%	85	78	91.8%	151	128	84.8%
合計		79	53	67.1%	130	100	76.9%	209	153	73.2%

※2年次編入の国費留学生1名を除いて作表。

次に、博士留学生在がいつどのクラスを履修していたのかを見たい(表5)。直接入学者と修士課程からの進学者の在籍第1学期は、1年次の第1学期である。入学前に研究生として静岡大学に在籍した学生は、静岡大学の学籍を得た学期を第1学期とした。

日本語不問で受け入れていることを反映して、日本語未習者向けの日本語1(入門)を受講する留学生在が最も多く、日本語3(中級前半)の受講は少ない。また履修時期は、第1学期、第2学期、つまり受講は静岡大学在籍1年目に集中していることが分かる。特に日本語未習者が多い研究生を経由しての入学者と直接入学者のうち、第1学期に日本語1を受講した入学者は、125名(74%)であった。

第3学期以降の受講者は大きく減少し、第3学期は第1学期の27%、第4学期は13%、第5学期は8%、第6学期はわずか2%である。しかし、それぞれの学期の修了率は、第1・第2学期がともに40%、第3学期が35%、第4学期は17%と下がったものの、第5学期は45%、第6学期は33%であり、日本語受講を続ける留学生在は研究中心の大学院生活の中にあっても、日本語受講の時間を確保していることがうかがえる。

表5 博士留学生の日本語履修者数と受講時期

	在籍学期	第1			第2			第3		
	クラス	1	2	3	1	2	3	1	2	3
全 体	受講者	125	9	5	36	37	7	8	15	15
	修了者	51	2	3	13	16	3	1	4	9
	修了率 (%)	41	22	60	36	43	43	13	27	60
修士から進学者	受講者	0	1	3	0	0	1	0	0	1
	修了者	0	0	1	0	0	1	0	0	0
研究生経由入学者	受講者	13	1	1	7	4	3	2	3	5
	修了者	6	1	1	1	3	0	0	1	3
直接入学者	受講者	112	7	1	29	33	3	6	12	9
	修了者	45	1	1	12	13	2	1	3	6

	在籍学期	第4			第5			第6		
	クラス	1	2	3	1	2	3	1	2	3
全 体	受講者	1	8	9	0	4	7	0	1	2
	修了者	0	0	3	0	1	4	0	0	1
	修了率 (%)	0	0	33	—	25	57	—	0	50
修士から進学者	受講者	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	修了者	0	0	0	0	0	1	0	0	0
研究生経由入学者	受講者	0	1	3	0	0	3	0	1	1
	修了者	0	0	2	0	0	1	0	0	1
直接入学	受講者	1	7	6	0	4	3	0	0	1
	修了者	0	0	1	0	1	2	0	0	0

表6は、受講人数の少ない修士からの進学者を除き、研究生を経由しての入学者と直接入学者の受講パターンをまとめたものである。最も多いのは、両キャンパスとも第1学期に日本語1を受講し、その後日本語を受講しないパターン（59名、41%）である。2学期までの継続者は38名（26%）、3学期までの継続者は28名（17%）であるが、修了率は第2学期までが46%、第3学期までが40%であり、第1学期の修了率（41%）と大きくは変わらない。

同じレベルのクラスを再履修する受講者は、日本語1が28名、日本語2が6名、日本語3が2名、合計36名で、修了率は41%である。一度修了しても再度履修する学生がいることから、8割以上出席し試験に合格しても日本語力に自信がない様子うかがえる。

日本語学習を進め、下のレベルから上のレベルのクラスへ進級する受講者は39名おり、修了者は20名（51%）であった。このうち、日本語1修了、日本語2修了、日本語3と連続して受講したのは9名、うち6名が日本語3も修了した。

静岡キャンパスと浜松キャンパスを比べてみると、第1学期の日本語1受講者数は静岡キャンパス（36名）より浜松キャンパス（84名）のほうが多く、修了率も静岡（12名、33%）より浜松（37名、44%）のほうが高い。受講継続者も、静岡キャンパスが10名な

のに対し、浜松は63名と多く、浜松キャンパスのほうが日本語受講に積極的であることがうかがえる。

表6 受講パターン (「○」=修了、「×」=修了せず、「—」=受講せず)

第1学期	第2学期	第3学期	合計	静岡	浜松
日本語1×	—	—	44	19	25
日本語1×	日本語1×	—	10	0	10
日本語1×	日本語1×	日本語1×	1	0	1
日本語1×	日本語1×	日本語2×	1	0	1
日本語1×	日本語1○	—	7	3	4
日本語1×	日本語1○	日本語2×	1	0	1
日本語1×	日本語2×	—	2	0	2
日本語1×	日本語2×	日本語3×	1	0	1
日本語1×	日本語2○	日本語3○	1	0	1
日本語1×	—	日本語1×	2	1	1
日本語1×	—	日本語2×	1	1	0
日本語1○	—	—	15	11	4
日本語1○	日本語1×	—	2	0	2
日本語1○	日本語1×	日本語1○	1	0	1
日本語1○	日本語1×	日本語2×	1	0	1
日本語1○	日本語1○	日本語1×	1	0	1
日本語1○	日本語1○	日本語2×	2	0	2
日本語1○	日本語2×	—	9	0	9
日本語1○	日本語2×	日本語2×	2	0	2
日本語1○	日本語2×	日本語2○	1	0	1
日本語1○	日本語2○	—	3	1	2
日本語1○	日本語2○	日本語3×	3	0	3
日本語1○	日本語2○	日本語3○	6	0	6
日本語1○	日本語2○	日本語2×	1	0	1
日本語1○	日本語2○	日本語2○	1	0	1
日本語1○	—	日本語2×	1	0	1
日本語2×	—	—	3	3	0
日本語2×	日本語2×	—	1	0	1
日本語2×	日本語3○	—	1	0	1
日本語2×	日本語3×	—	1	0	1
日本語2○	日本語3×	日本語3×	1	0	1
日本語2○	日本語3○	—	1	1	0

第1学期	第2学期	第3学期	合計	静岡	浜松
日本語3〇	—	—	1	1	0
日本語3〇	日本語3×	—	1	0	1
—	日本語1×	—	2	0	2
—	日本語1×	—	4	4	0
—	日本語1×	日本語1×	1	0	1
—	日本語1〇	—	1	1	0
—	日本語1〇	日本語2〇	1	0	1
—	日本語1〇	日本語3〇	1	1	0
—	日本語2×	日本語3〇	1	0	1
—	日本語2〇	日本語2〇	1	1	0
—	—	日本語1×	2	2	0

5. 博士留学生在が日本語を受講する理由、受講しない理由

博士留学生の日本語履修の主たる動機は、日常生活（買い物や移動など）や日本人学生との日常会話等であり、それを受けて国際交流センターでは、日常的なコミュニケーションができるようになることを目標にコースを設定し運営してきた。研究室における研究活動は英語で行うことができるが、研究室の外では英語での情報提供が極端に少ないためである。また博士留学生は年齢が高く、家族を伴っての来日者もいる。子供の就学をはじめさまざまな場面で日本語が必要になるため、日本語受講を希望する場合もある。国際交流センターでは、留学生の配偶者に日本語教育プログラム受講を認めているが、配偶者も日本語未習で来日することが多く、日常生活に支障が生じるであろうことは想像に難くない。

また、最近の傾向として、日本での就業を希望する博士留学生もいる。博士留学生の進路は従来研究職への希望が多く、現在もその傾向は変わらない（ライアン 2014）が、日本企業への就職を希望する者も徐々に増えてきた。静岡大学は平成24年度科学技術人材育成費補助事業「ポストドクター・キャリア開発事業」に採択された。平成24年度～平成28年度までの5年間の補助を受け、名古屋大学を共同実施機関として「博士キャリア開発支援センター」を設置し、産学協働でキャリア教育（座学、インターンシップ）と、キャリア支援等を実施している。高度教育を受けた人材の能力を産業界で適切に活用すること、優れた研究成果を社会で有効活用することが目的であり、日本人を主たる対象とするが、博士課程在籍生の半数を占める留学生も支援の対象としている。留学生の日本での就職、特に日本企業への就職には高い日本語力が求められ、専門性よりも日本語力が重視される傾向も指摘されている（クオリティ・オブ・ライフ 2012）。このような現状を受け、GSSTのオリエンテーションや国際交流センターの留学生オリエンテーションにおいて、日本企業の留学生採用傾向を説明し、博士留学生が進路選択の幅を広げるには日本語が必要なことを伝えている。

このように、日常生活での日本語ニーズ、卒業後の日本語ニーズがあり、また日本語学習の機会が提供されていながら、博士留学生の日本語受講率は決して高いとは言えない。

日本語受講率が低い理由は、田崎他（2010）が英語で学位を取得する学習者の特徴として述べているように、制度上専門の講義や研究に日本語が不要であることが第一に挙げられる。その言語を話す人々が近くにあまりいないような状況では道具的動機づけが重要とも言われている（佐々木 2007）。博士留学生は目標言語環境にありながら日本語を話す人々が近くにあまりいない状況であるが、留学の主目的である学位取得・研究活動に支障がないため、日本語を学習する道具的動機が弱いと考えられる。

学習動機が弱いことに加え、日々の研究活動に多くの時間と労力を割いていることも、日本語受講が難しくなる大きな理由である。GSST所属の博士留学生は、一日平均11時間を研究に費やしている（ライアン 2014）。日本語力が著しく低い博士留学生は生活上の必要から日本語学習を希望し、日本での生活に早く慣れるため来日直後に、また研究活動が本格化していない1年目に日本語コースを受講することが推測される。しかし、出席が足りない、定期試験を受験していない等の理由で、成績が「D（不可）」となる受講者が常に半数程度いるのが実情であり、たとえ1年目であっても、研究活動と並行して日本語授業に恒常的に出席することが困難であることがうかがえる。入門、初級レベルは、それほど複雑な内容があるわけではなく、どちらかと言えば演習的な授業である。そのため、出席が学習の進み方に大きく影響を与えるが、研究を優先すると日本語クラスを欠席せざるを得ず、結果として日本語力は低いまま留まることになる。

指導教員が研究活動に専念するよう指示する場合もある。GSSTでは、2015年4月までに大使館推薦による国費留学生在が11名入学している（静岡キャンパス1名、浜松キャンパス11名）。彼らは、「大学における講義・実験・実習等の研究指導は原則として日本語で行われる」ため、「日本語能力が十分でない」と配置大学から判断された場合は最初の6か月間、配置された大学又は文部科学省が指定する大学等の予備教育機関に入学し、日本語教育を受ける^(注1) ことになっており、博士課程進学前に6ヶ月～1年6ヶ月間、研究生として静岡大学に在籍する。しかしながら、GSSTに配置された11名のうち、日本語研修コースを受講した者は、静岡キャンパスの1名と浜松キャンパスの1名のみである。講義・実験・実習等の研究指導が英語で行われるためだが、日本語研修コースが静岡キャンパスでのみ開講されていることも、受講者数が少ない原因であると思われる。浜松キャンパスに在籍する予定の留学生を、日本語研修コース受講のために半年間静岡に在住させれば、その期間はほとんど研究活動ができなくなるからである。しかし、浜松キャンパスの日本語受講率と受講継続率から、もし日本語研修コースが浜松キャンパスで開講されれば、国費留学生をはじめ私費留学生も研究生としての第1学期に受講し、修了できるのではないだろうか。

静岡キャンパスと浜松キャンパスでは日本語受講に差がある。静岡キャンパスよりも浜松キャンパスのほうが日本語受講者が多く、研究生を経ての入学者も浜松キャンパスのほうが多く受講している。日本語学習の需要は静岡よりも浜松のほうが高いが、浜松キャンパスには日本語研修コースが設置されていないため、日本語教育プログラムを受講することになり、受講者数、受講率とも高くなるのではないかと推測する。また、浜松キャンパスは工学部を中心に企業と緊密に連携した教育・研究体制があり、学士課程修了、修士課程修了の日本人はもちろんのこと、留学生も製造業を中心に日本企業に多数就職している。このような環境の中、博士留学生が研究職に加えて、日本企業への就職に関心を持ち、日

本語受講を希望すると推測する。

修士課程から進学した博士留学生（35名）は日本語力がある程度高いが、それ以外の留学生で来日後日本語を受講して日本語3（中級前半）に進んだ受講者は、19名に留まる。その結果、日本語力が低いために一般企業への就職活動に困難があり、在学中にインターンシップへの参加を希望しても、受入れ先が著しく制限されるという現実がある。来日時に日本語未習者が多く、来日後の日本語受講にも制限がある現状では、博士留学生の日本での就職は、どの職種においても極めて難しいと言わざるを得ない。

6. 博士課程の今後と日本語コースについて

日本では、1990年代に入ってから2000年ごろまで、博士課程の在籍者数は毎年3000人以上の規模で増加し続けてきた。これは、大学院重点化という国の方針を契機に一部の大学院で学生定員を拡大したためである。一方で、少子化や社会・経済情勢の変化により2007年には減少に転じ、その後は数百人の幅で増減を繰り返している。このような変化にともない、博士課程に在籍する外国人留学生も増加し、学士課程、修士課程に比べ、外国人留学生が占める割合は大きい（表7）。

表7 2014年度高等教育機関の課程別留学生比率^(注2)

	全在籍者数	留学生数	留学生比率
学士課程	2,552,022	65,865	2.6%
修士課程	159,929	26,518	16.6%
博士課程	73,704	13,461	18.3%

（ライアン・袴田 2015）

もっとも高度な専門人材は、博士号取得者／課程修了者である。技術立国を目指す日本では、博士号取得者／課程修了者が社会の多様な分野に活躍の場を広げることが強く期待される。政府が「高度人材ポイント制」^(注3)を開始し、出入国管理上の優遇措置を打ち出したことから、今後、博士課程への留学生受入れは拡大すると予測される。しかしながら、受入れ拡大には日本語力のハードルを設けないほうが容易であるという事実は変わらないであろう。一部の大学院では日本語科目や異文化理解科目が、大学院の卒業単位に算入されるよう課程を整備しているところもある（田崎他 2010）。海外から高度人材を呼び込み、日本への定着を図るのであれば、このような形で学習動機を強化することも一案である。

日本で正規生として数年間生活するのであれば、日本語は不可欠であるが、GSSTでは英語で研究指導が行われるため、博士留学生、指導教員は日本語の必要度は低いと判断して研究活動を優先する。その結果時間的な制約から、日本語クラスに出席を続けることが難しいことが確認できた。しかも、国費留学生が多い浜松キャンパスに日本語研修コースがないため、受講の希望があっても物理的に受講できない可能性もうかがえる。一方で、日本語受講状況から、博士課程1年目は比較的受講しやすいと推測される。この時期に可能な限り出席し、日本語力を高めておくことが、その後の学内外の生活の質、また進路選

扱の幅に影響を与える。2015年度からは、博士留學生が多く履修する日本語1を1コマ目（8:40－10:10）に変更し、専門科目の授業と日本語授業の重なりを少なくする工夫をした。

日本語を初めて学ぶ未習者が、研究活動と平行して日本語力を中級以上に向上させることは非常に難しい。本来国費留學生が対象の日本語研修コースは国費留學生が多い浜松キャンパスにも開設されるべきだが、予算や人員上の制約もある。たとえ博士留學生が日本語履修の希望が持っていたとしても来日後は時間的に制限がある。そのため国際交流センターは2015年10月入学者から日本語学習への動機づけを目的に、日本語力が留學生活と卒業後の進路に関連することを説明し、入学予定者にひらがな、カタカナの来日前学習を勧めることを始めた。来日前の学習が来日後の日本語力向上に効果があると判断されれば、今後、遠隔授業やウェブ学習など、来日前の学習を組み込んだ日本語コースの構築を検討したい。

（注）

- 1 文部科学省「2016年度 日本政府（文部科学省）奨学金留學生募集要項 研究留學生」より
- 2 留學生数は日本學生支援機構「平成26年度留學生調査」より、全在籍者数は文部科学省『平成26年度學校基本調査（確定値）の公表について』より引用
- 3 法務省入国管理局：http://www.immi-moj.go.jp/newimmiact_3/system/index.html

参考文献

- クオリティ・オブ・ライフ（2012）「平成24年度 アジア人財資金構想プロジェクトサポートセンター事業「日本企業における高度外国人材の採用・活用に関する調査」報告書」
- 佐々木泰子（2007）『ベーシック日本語教育』ひつじ書房
- 田崎敦子・越前谷明子・小熊貞子・上原真知子・中川和枝（2010）「理工系大学院における日本語教育プログラムの成果と課題—英語で研究活動を行う留學生を対象に—」『多摩留學生教育研究論集』第7号，pp.23-29
- ライアン優子（2014）「博士課程における外国人留學生の受け入れに関する調査」『静岡大学国際交流センター紀要』8巻，pp81-102
- ライアン優子・袴田麻里（2015）「博士課程における外国人留學生の受け入れと支援—国立大学の理工系を中心に—」『留學交流』2015年12月号

Japanese Language Study for Doctoral Students

HAKAMATA, Mari

This paper examines the enrollment and attendance of International doctoral students in Japanese language courses in order to improve the effectiveness of these Japanese language courses. Doctoral course students can do research in English and receive a doctoral degree in the Graduate School of Science and Technology at Shizuoka University. Graduate students who have not learnt Japanese register in a Japanese language course right after they enroll in Shizuoka University. But most of them remain at a low level of Japanese proficiency because doctoral students give priority to doing research, and have difficulties in daily life and job hunting in Japan. The International Center must take into account the conditions of doctoral students and make appropriate changes to Japanese courses.